

図-15 神と

図 版

図版— 1

1. アカガシ亜属 (CP-20)
2. コナラ亜属 (FP-8)
3. シイ属-マテバシイ属 (FP-8)
4. クリ属 (FP-8)
5. キハダ属 (FP-19)
6. エノキ属-ムクノキ属 (CP-20)
7. ニレ属-ケヤキ属 (CP-20)
8. カバノキ属 (CP-20)
9. ヤマモモ属 (CP-20)
10. コウヤマキ属 (CP-38)
11. スギ属 (WP-1)
12. ヒノキ科 (FP-8)
13. ツガ属 (WP-1)
14. 二葉マツ類 (WP-1)
15. マキ属 (CP-38)

图版— 1



1



2



3



4



5



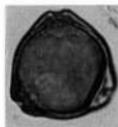
6



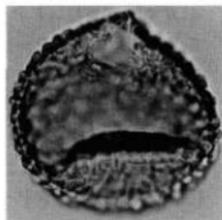
7



8



9



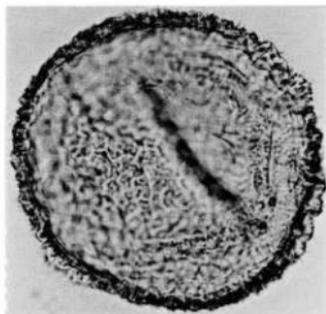
10



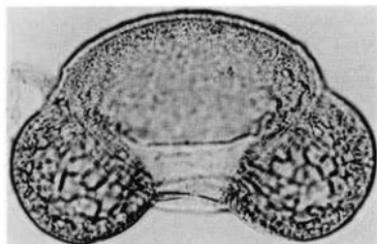
11



12



13



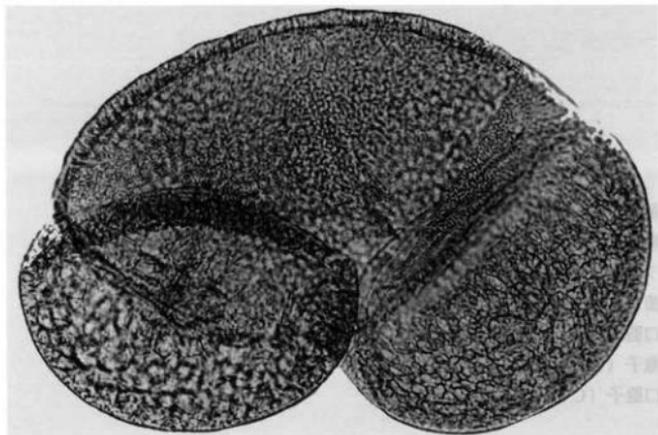
14



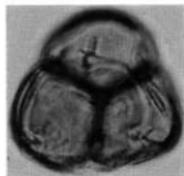
15

図版 - 2

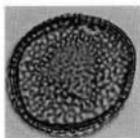
1. モミ属 (CP-20)
2. ツツジ科 (FP-22)
3. ガマ属 (CP-20)
4. ガマ属, 四葉粒 (FP-8)
5. オモダカ属 (FP-19)
6. ゴキヅル属 (FP-8)
7. ナアシコ科 (WP-1)
8. アカザ科 (CP-38)
9. ヨモギ属 (WP-1)
10. タンポポ亜科 (WP-1)
11. ツタ属 (CP-38)
12. サナエタデ節-ウナギツカミ節 (WP-1)
13. カヤツリグサ科 (CP-20)



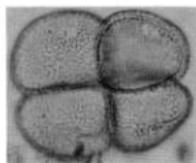
1



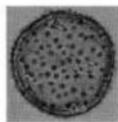
2



3



4



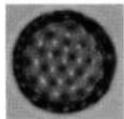
5



6



7



8



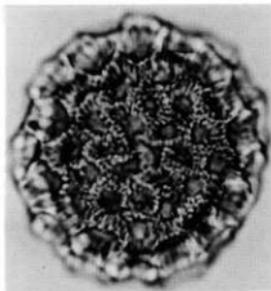
9



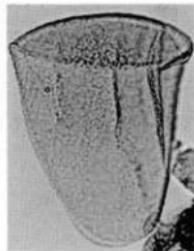
10



11



12

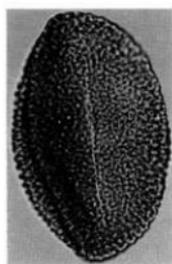


13

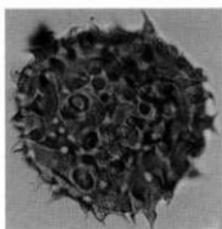
図版－3

1. ソバ属 (CP-38)
2. ワタ属 (EP-36)
3. アブラナ科 (WP-37)
4. 土壤菌 (FP-19)
5. 三条口胞子 (WP-1)
6. コケ胞子 (FP-22)
7. 単条口胞子 (CP-20)

图版—3



1



2



3



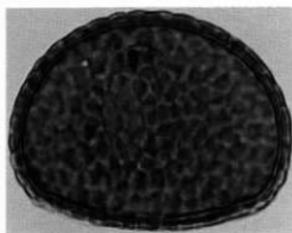
4



5



6



7

第2節 久宝寺遺跡第23次出土木材の樹種

バリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

久宝寺遺跡23次調査10調査区からは、古墳時代初頭の木棺や建築部材が出土している。古墳時代の木棺については、これまでも御殿山古墳、黄金塚古墳、塚塚古墳、高井田山古墳等で樹種同定が行われており、コウヤマキが多いことが明らかとなっている(尾中, 1936; 小原, 1954, 1960; バリノ・サーヴェイ株式会社, 1996)。

本報告では、木棺および建築部材の樹種同定を行い、木材利用に関する資料を得る。

2. 試料

試料は、404号墳主体部木棺の部材5点(試料番号1~5)、405号墳主体部木棺の部材3点(試料番号6~8)、SD301出土の建築部材2点(試料番号9・10)の合計10点である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表1に記した。

3. 分析方法

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柀日(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール, アラビアゴム粉末, グリセリン, 蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

4. 結果

樹種同定結果を表1に示す。木材は、全て針葉樹で3種類(モミ属・スギ・コウヤマキ)に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・モミ属 (*Abies*) マツ科

軸方向は仮道管のみで構成され、早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞は壁は粗く、じゅず状末端端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1~4個。放射組織は単列、1~20細胞高。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞がほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2~4個。放射組織は単列、1~15細胞高。

表1 樹種同定結果

番号	遺構・部位	樹種
1	木棺 (244) 小口坂 (頭位側)	コウヤマキ
2	木棺 (245) 小口坂 (足位側)	コウヤマキ
3	木棺 (243) 西側板	コウヤマキ
4	木棺 (242) 東側板	コウヤマキ
5	木棺 (246) 底板	コウヤマキ
6	木棺 (248) 西側板	コウヤマキ
7	木棺 (247) 東側板	コウヤマキ
8	木棺 (249) 底板	スギ
9	建築部材 (148)	スギ
10	建築部材 (149)	モミ属

コウヤマキ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野導孔は窓状で、1分野に1個。放射組織は単列、1～5細胞高。

5. 考察

木棺にコウヤマキが多い結果は、これまでに行われた古墳出土の木棺材の樹種同定結果（尾中, 1936；小原, 1954, 1960；バリノ・サーヴェイ株式会社, 1996）とも一致している。今回の調査では、405墳主体部木棺で底板と側板とで樹種が異なる結果が得られた。部位によって樹種が異なる例は、東大阪市鬼虎川遺跡第31次調査の弥生時代中期前半とされる木棺で蓋がコウヤマキで、他の部位（小口・北東側板・南東側板・底板）がヒノキ属という例がある（バリノ・サーヴェイ株式会社, 1990）。しかし、古墳時代の木棺では、基本的に全ての部材がコウヤマキである。

引用文献

小原二郎 (1954) 黄金塚古墳より出土した木材について。宋永雅雄編「日本考古学報告第五冊 和泉黄金塚古墳」, p.131-136, 綜芸社。

小原二郎 (1960) 富木車塚古墳出土の識別。「大阪市立美術館学報 3 富木車塚古墳」, p.111-112, 大阪市立美術館。

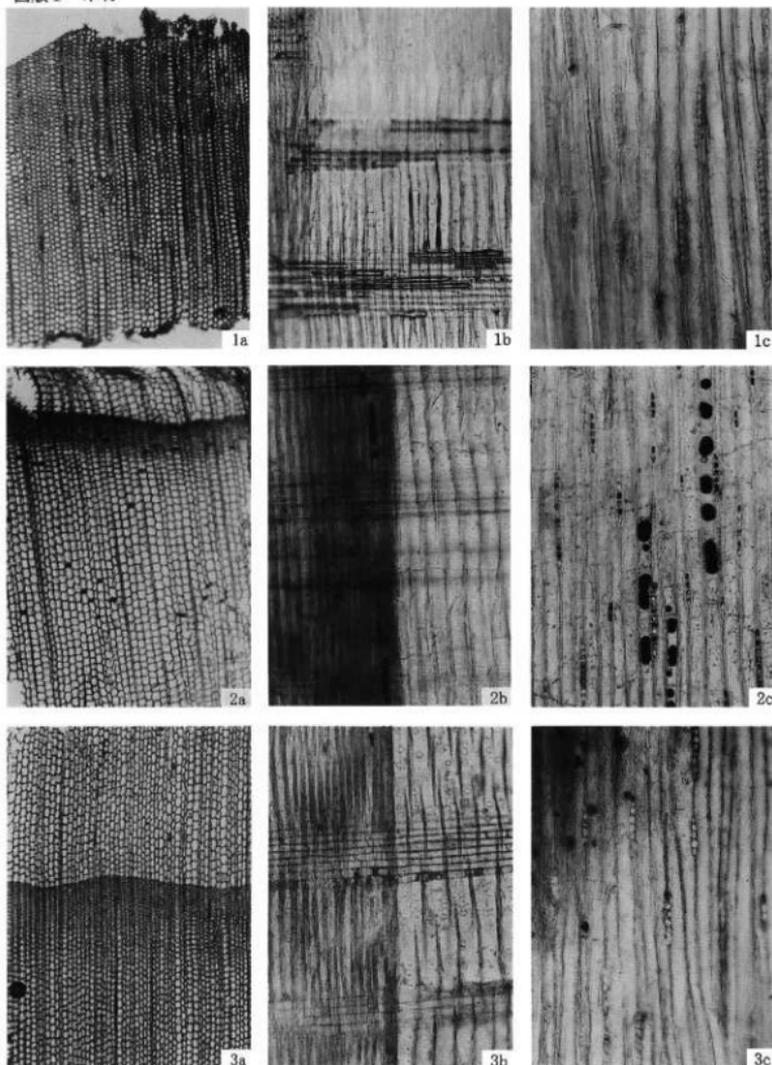
尾中文彦 (1936) 古墳其他古代の遺構より出土させる材片に就て。日本林学会誌, 18 (8), p.588-602。

バリノ・サーヴェイ株式会社 (1990) 鬼虎川遺跡第31次調査出土の木棺材樹種同定及び花粉分析報告。

「鬼虎川遺跡第31次発掘調査報告」, p.12-15, 財団法人東大阪市文化財協会。

バリノ・サーヴェイ株式会社 (1996) 高井田山古墳から出土した木材と赤色物質の材質。「柏原市文化財概報 1995-II 高井田山古墳 [本文編]」, p.197-201, 柏原市教育委員会。

図版1 木材



1. モミ属 (試料番号10)
 2. スギ (試料番号8)
 3. コウヤマキ (試料番号2)
- a: 木口, b: 柀目, c: 板目

200 μ m: a
 200 μ m: b, c



第3節 401号墳北周溝検出の木棺墓401底板の年輪年代について

独立行政法人奈良文化財研究所 光谷拓実

1. 久宝寺遺跡出土木棺材の年輪年代調査

近畿地方において年輪年代法に使える主要樹種はヒノキ、スギ、コウヤマキである。ヒノキとスギの暦年標準パターン（年代を1年単位で割り出す際に基準となる暦年の確定した標準パターン）は、その先端がヒノキで紀元前912年、スギで651年までのものが作成できており、弥生時代のほぼ全期間をカバーしている。実際にこの2種類の暦年標準パターンを使い、池上首根遺跡をはじめ、各地の弥生遺跡の年代が判明した事例は数多い。一方、コウヤマキの暦年標準パターンは22年～741年までのものが作成できてはいるが、その先端部分の22年～300年くらいにかけては遺跡からの出土例が少ないため、暦年標準パターンになっていない。この少数年輪データの年代範囲を、他の出土木材（コウヤマキ）試料によって年輪データの補充と紀元前まで延長できる出土木材を20年近くにわたって探索してきているが、長年にわたってこの目的にかなうような出土木材がいまだに発見できていない。一方で、弥生時代の木棺材で作成した暦年未確定の標準パターン（フローティングクロノロジー）は、781年間のものが作成済みである。この標準パターンに暦年を確定することは、まさに悲願となっているが、未だに上記の目的にかなう出土木材は発見されていない。

2002年、八尾市文化財調査研究会調査係長 原田昌則氏より、久宝寺遺跡の発掘調査現場でコウヤマキの木棺材らしきものが発見されたので年輪年代法による調査をしてもらえないか、との連絡を受けた。発掘所見を伺うと、まさしく長年にわたって探し求めてきた年代にあてはまる出土木材の可能性のあることから、大きな期待をもってその搬入を待った。その後2002年10月になって、待望の木材が研究室に持ちこまれた。その出土木材は幅広で厚板状のものであるが、発掘現場にて鋼矢板によって切断され、全体像を知り得る形状のものではなかった。

樹種は木材組織による識別によって、コウヤマキであることが判明した。一見して、年輪密度の高い良質の材であることがわかった。大きさは長さ約59.0cm、幅約46.0cm、厚さ約12.0cmのサイズであった。本来なら、保存状態の良い場合は非破壊での年輪計測が実施可能であるが、この場合、一部が発掘調査時に破損したりしていたため、直接非破壊での年輪計測は難しいものと判断した。そこで、より正確な年輪計測をするため、鋸による切断の許可を得、切断した木口面から年輪読取器による年輪計測を実施することとした。

2. 方法

研究室に搬入後、鋸で切断し、年輪読取器（実体顕微鏡付き、0.01ミリまで計測）を使い、切断面（木口面）から2方向について計測し、あとで相互に年輪パターンの照合をおこない、重複した箇所の年輪データを平均し（1本化）、出土木材そのものの年輪データとして以下の作業に備えた。

計測して得られた年輪データと照合するために使用する暦年標準パターンは、大阪府下の出土木製品や奈良県四條古墳出土木製品の年輪データと平城宮跡出土木製品の年輪データなどで作成した720年間分（22年～741年）と、おもに大阪府と兵庫県下の遺跡出土木製品で作成した781年間の暦年未確定の標準パターンの2種類を使うこととした。

コンピュータによる年輪パターンの照合法は、相関分析法¹⁾によった。このとき、年輪パターン照合の成否の目安として、 t 検定による t 値（一種の年輪パターンの類似度を表す数値）を検出し、最大 t 値を示した年代位置を照合成立の基準としている。このとき、 t 値の数値が高いほど、相方のパターンが酷似していることを示している。当研究所では、一応の基準として t 値 ≥ 5.0 前後以上となる年代位置でもって、年輪パターン照合は成立したと見なしている。さらにこの検出位置でもって目視による年輪パターングラフをライトボックス上で重ね合わせ、詳細にチェックした後、問題がないと判断した時点で最終的に出土木製品の年輪年代を確定するという手続きをとっている。

3. 結果

〈年輪年代法〉

切断した木口面に2方向（Aライン、Bライン）の測線を設定し、年輪幅を計測した。Aラインにおいては275層分、Bラインにおいて273層分の年輪データ収集した。この2測線から得られた年輪データの照合をおこなって年輪データの1本化を計り、トータルで405層分の年輪データを獲得した。これとコウヤマキの暦年標準パターン（22年～741年）との照合においては、 t 値 ≥ 5.0 前後以上となる年代箇所は検出できなかった。残念ながら、ひとまずこの出土木材の年輪年代は確定できなかったことになる。

ついで、暦年未確定の標準パターン781年間分と照合したところ、標準パターンの後端から出土木材の中心方向175層分の年代範囲において、 t 値が5.1となる箇所が1ヶ所だけ検出された。この検出位置で相方の年輪パターングラフを詳細に検討したところ、両者は正しく重複しているものと判断した。この結果、405層分の年輪は樹皮方向において230層分が暦年未確定の標準パターンの後端より新しい年輪であることが確定した。これまで、781年間分の標準パターンの後端は、紀元前後あたりのものであろうと推測してきた。今回の出土木材によって、その後端が一挙に230層分、紀元後に向かって延長できたことになり、まさに期待どおりの年輪データとなった。しかし、暦年標準パターンとの照合はまだ成立していない。今後、この出土木材に正確な年輪年代を確定していくには、西暦300年前後の遺跡から年輪が300層～400層を超えるような好個の出土木材の発見が数点でも発見され、暦年標準パターンの年輪データが補充できれば、この出土木材の年輪に暦年が確定する可能性は高い。そうなったときには、長年にわたって暦年が確定しなかった781年間分の標準パターンに年代が与えられ、弥生・古墳時代の年代論争に重要な年代情報を多数提示できることになる。

〈炭素14年代法〉

年輪年代法による暦年の研究は不成功に終わったので、つぎにはAMSによる炭素14年代法でこの出土木材の年代を測定してみることにした。そこで、出土木材の最外年輪の一部を年代測定用に採取し、サンプルはアルミ箔に梱包し、国立歴史民俗博物館の今村峯雄氏に送付した。得られた結果をみると、較正年代は70A.D.～250calA.D. (95.4%)である。

今回、歴博に送付した年代測定用サンプルは厚さ2mm前後のものであったので、通常の炭素14年代法しか実施できなかったが、さらに高精度の年代値を求めるには、炭素14ウィグルマツ法がある。ウィグルマツ法は、年代間隔が既知の複数試料の炭素14濃度に基づく高精度年代測定

法で、±10～20年あるいはそれ以下の高い精度で正確な実年代を求める方法である。これをおこなうには、供試用サンプルに30層～70層程度の年輪が必要とされている。今後、この出土木材の年代精度をあげるためにも、ウィグルマッチ法をおこなう必要がある。いずれにしても近い将来、年輪年代法によってもこの出土木材に年輪年代が確定することは間違い無い。

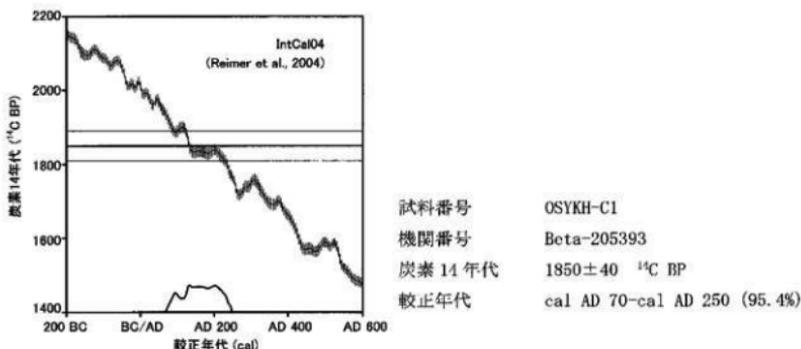


図1 出土木材の炭素14年代法による較正年代 (cal A.D.)

4. 展望

年輪年代法やAMSによる炭素14年代法の登場によって、弥生時代、古墳時代の年代観が大きく揺らいでいる。こうしたなかにあつて、本遺跡から出土した木棺材の断片に正確な暦年が確定すれば、本遺跡の年代が明らかになるばかりでなく、弥生時代の木棺材等で作成した781年間分の標準パターンにも暦年が確定することになり、この標準パターン作成に用いた数々の弥生遺跡の遺構、遺物に多くの暦年が与えられることにつながる。その効果は、弥生時代の編年研究において計り知れないものがある。

また、韓国においても、忠清南道公州郡邑宋山古墳群における武寧王陵墓の木棺材にコウヤマキが使われていた。コウヤマキはわが国特産の樹種(1科1属1種)で大変珍しい針葉樹であるが、この木を用いた木棺材が韓国においても、これまでに10数例が出土しているという。もし、日本産のコウヤマキを使って木棺が造られていたとすれば、日本側で作成したコウヤマキの暦年標準パターンを使って、韓国の木棺材(コウヤマキ)にも暦年の確定が可能となる。もし日本側のコウヤマキ材で作成した暦年標準パターンと合致すれば、その時点で間違いなく日本産のコウヤマキを使って木棺を製作したことの証明となり得る。こうしたことを明らかにするためにも、今後一層、4世紀代の遺跡からコウヤマキ材の出土情報が待たれる。

1) 田中琢、光谷拓実、佐藤忠信『年輪に歴史を読むー日本における古年輪学の成立ー』、奈良国立文化財研究所学報第48、同朋舎出版、1990年

第5章 まとめ

今回実施した久宝寺遺跡第23次の発掘調査は、旧国鉄の竜華操車場跡地を中心とする大阪竜華都市拠点地区の基盤整備に伴う久宝寺南駅前線を対象としたもので、調査区の総数は26箇所(K H97-23-1～K H97-23-26)を数える。そのうち、南北方向に設置された西端の1～3調査区と東端の24～26調査区以外は東西方向に設定された調査区で、東西方向の総延長は約700mを測る。このように、今回の調査は広範囲に及ぶ線的な調査の連続で、しかも調査区により掘削深度に差異があるため、調査対象とした時期についても一定ではなかった。これら一連の調査では、弥生時代前期～近代に亘る遺構・遺物が検出されている。

ここでは、今回の発掘調査で得られた考古学・地質学的な知見および周辺で実施された既往調査成果を含めて、弥生時代前期以降の集落推移を概観してみる。

弥生時代前期

当該期の遺構は、8～13調査区で第7面とした第Ⅷ層(T.P.+4.9～4.7m)上面で検出した。土坑等の居住域を構成する遺構は8調査区に集中しており、前期新段階を中心とした土器類が出土している他、包含層内からは前期中段階に遡る土器片が出土している。南接する水処理施設に伴う調査では、東接する多目的広場の調査で検出された縄文時代晩期(長原式)の集落に近接する地点で、前期中段階に成立した集落が検出されている。生産域としては、水処理施設の南東部で実施された小阪合直送幹線発進立坑に伴う調査で水田が検出されている。また水処理施設で検出された集落からは、土偶や石棒等の縄文系呪術具が出土しており、集落成立の初期段階においては両者間の交流や共生の事実が想定され、河内平野内部での縄文社会から弥生社会への変化を推定するうえで良好な資料といえる。

弥生時代中期

当該期に該当する地層は、9～13調査区で検出した第Ⅸ層(T.P.+5.3～5.1m)がある。本調査では遺構は検出されていないが、中期前半(第Ⅱ様式)に比定される土器類が出土している。南接する水処理施設および多目的広場では、中期前半に等高線に沿って造られた大畦畔とそれに取り付く畦畔で構成される一辺10m程度の水田を中心とする生産域が検出されている。

弥生時代後期

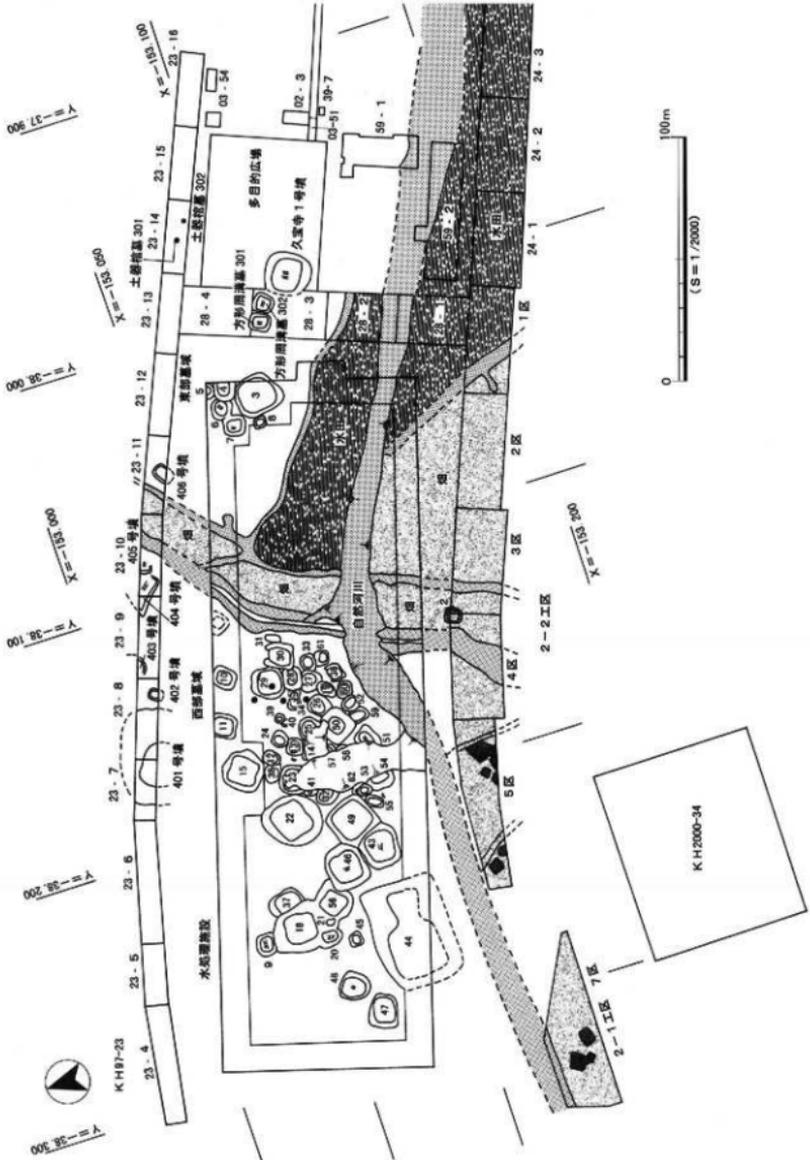
弥生時代後期前半の遺構は、8・9・11～13調査区の第Ⅹ層上面(T.P.+5.6～5.0m)を中心に検出した。湿地状地形に展開する小穴・自然河川・足跡群が中心である。南接する水処理施設では、水田開発に伴う廃土を集めた高まりが随所で確認されており、この高まり上に構築された堅穴住居が検出されている。後期前半以降は氾濫性堆積層である第Ⅹ層(0.4～1.25m)が厚く堆積している。このことは、従前より指摘されているように、当該期が不安定な環境下であったことを裏付ける事象で、当地一帯が洪水を成因とする大規模な沖積作用を直接的に受ける環境下であったことを示している。後期後半の遺構は5面とした第Ⅺ層上面(T.P.+5.9～5.5m)で検出した。2～10調査区の広範囲にわたって検出されているが、7調査区で検出した居住域に関連する遺構以外は、小溝群を中心とする畑作に関連した遺構が大半を占めている。南接する水処理施設においても居住域の周辺に多条の小溝で構成される畑地が検出されている。

古墳時代初頭前半(庄内式古相)～古墳時代前期前半(布留式古相)

当該期の遺構は7～11調査区で検出した。第Ⅺ層上面(T.P.+6.2～5.8m)を構築面とするもので、密集する墳墓群で構成される墓域および多条の小溝を伴う畑を中心とする生産域を検出した。墓域は、10調査区東部で検出したS D 412より西側に広がる西部墓域と11調査区西部で検出したS D 428より東側に広がる東部墓域に二分される。西部墓域では墳墓5基(401～405号墳)、東部墓域では1基(406号墳)を検出した。これらの東・西部墓域の南部および東部への広がりについては、(財)大阪府文化財センターが行った竜華東西線2-2工区(3・4区)、多目的広場、水処理施設、当調査研究会が実施した第28次調査と本調査検出例を含めて総数67基に及ぶ墳墓が検出されており、南-北ならびに北東-南西に伸びる溝間に設けられた畑・水田で構成される生産域を介して両墓域が東西に対峙する形で存在している。墳墓群の造墓期間は古墳時代初頭前半(庄内式古相)～前期前半(布留式古相)で、西部墓域が先行している。

西部墓域については、南接する水処理施設で検出された墳墓群(9～63号墳)を含めて現時点での総数は57基におよぶ。西部墓域の墳墓分布は、検出部分で東西約190m、南北約140mの範囲に展開しており、さらに北東に広がっていた可能性が指摘できる。墳形は前方後方(墳)形墳墓である44号墳を除けば方形ないしは長方形を呈するものが大半を占める。墳丘の規模としては、一辺が3～5mの小型、6～8mの中型、10m以上的大型に分類されるもので、構築時期の古い墳墓が小規模で墳墓間の空間が狭く、時期が新しくなるにつれて規模の増加と墳墓間の空間が広がることが指摘されている。造墓形態としては、周溝を共有する連鎖的な造墓形態を取るものが多く、加美遺跡の第1次調査で検出された46基の加美遺跡墳墓群との共通点が認められる。

本調査で検出した404号墳については、不確定な要素が含まれているが、墳丘形態が長方形を呈するもので、東西幅6.0m、南北幅13.5mを測る大形の墳墓に分類される。西部墓域のなかでは、最大規模の墳丘および組合式木棺(全長2.85m)を持つことから、西部墓域の形成初期段階にあたる古墳時代初頭前半(庄内式古相)に築造された始祖的な性格を有する有力首長の墳墓であったことが想定される。東接する405号墳については、墳丘規模は小さいものの他に類例を見ない「合掌形」の構造を持つ組合式木棺を主体部に持つもので、404号墳との従属的な関係が推定される。西部墓域の西端で検出した401号墳については、古墳時代前期前半(布留式古相)に築造されたもので、墳丘規模は東西幅で16.1m、周溝幅が7.7～14.0mを測る墳墓で、前方後方を呈する44号墳を除けば、西部墓域のなかでは最大規模を有する。古墳時代前期前半(布留式古相)に墳丘規模が拡大する傾向は、加美・久宝寺遺跡内で検出された墳墓に共通した現象であり、西部墓域においても15号墳、22号墳および前方後方(墳)形の44号墳がある。このような当該期の大形墳墓については、墳丘を巡る周溝が幅広で、浅く造られている特徴があり、墳丘を大きくみせる視覚的な効果が図られている。供献土器の内容においても、庄内式期に見られた変類が減少し、布留式古相段階においては、壺類や小形精製土器の増加の他、底部有孔壺形土器の使用が顕在化している。401号墳からも、底部穿孔を持つ二重口縁壺(217)が出土している。また401号墳の北周溝内で検出された木棺墓401の棺材(底板)に使用されていたコウヤマキ材の炭素14年代法による較正年代では70A.D.～250cal A.D.(95.4%)の数値が示されている。当該期の比較資料が乏しく、資料の増加を待ち判断する必要があるが、中河内地域における古墳時代前期前半(布留式古相)の実年代の一端を考えるうえで一つの指標となろう。



第181図 調査地周辺の古墳時代初頭前半(庄内式古相)～前期前半(布留式古相)の集落分布図

東部墓域については、西側が本調査検出のS D428、南側が水処理施設の東部から第28次調査で検出された北西-南東に伸びる溝で区画された空間を墓域としている。本調査で1基(406号墳)、水処理施設で6基(3~8号墳)、第28次調査で2基(301・302方形周溝墓)、多目的広場で1基(久宝寺1号)の総計10基が検出されている他、本調査(14調査区)においては、土器棺墓2基(土器棺墓301・土器棺墓302)が検出されているため、墓域が北東部に広がっていた可能性がある。これらを含めて、現時点では東西約110m、南北約60mがその範囲と推定される。水処理施設で検出された3~8号墳については、6号墳を中心として周溝を共有する連鎖的造墓形態をとるので、西部墓域の一部と共通した特徴を示している。特に東部墓域のなかで東端に位置する、久宝寺1号墳については、墳丘自体の遺存状況および、埋葬主体部を構成する割竹形木棺、周辺遺物群の遺存状態が良好であった。なかでも、方形の墳丘四隅に底部穿孔を持つ大形直口壺を配置することや、北周溝内から精製土器群と共に出土した棒状・板状の木製品の存在は、具体的な葬送儀礼の一端を推定するうえで示唆的である。これらの意味で、久宝寺1号墳が従前の地域的経帯を持つ周溝墓系墳墓から、ヤマトを中核とする広域におよぶ政治体制の波及のなかで、古墳時代前期前半(布留式古相)に成立した出現期古墳として捉えられている。久宝寺1号墳の発見は、古墳時代前期前半(布留式古相)に、周溝墓から古墳への墓制変化が中河内地域に波及したことを明確に定義づけた点で注目に値する。

一方、生産域を構成する畑地については、S D413とS D428に挟まれた約16mの狭小な範囲内に設けられたもので、南部への統きについては水処理施設、竜華東西線2-2Ⅰ区(1~5区)、竜華東西線2-1Ⅰ区(7区)で検出されている。水出については、水処理施設南東部、2-2Ⅰ区(1区)、第28次調査(1・2調査区)、第24次調査(1~3調査区)、第59次調査(2区)で検出されている。これらの墓域・生産域に関係する居住域としては、南部では竜華東西線2-2Ⅰ区(5区)、竜華東西線2-1Ⅰ区(7区)、第34次調査が近接している他、北・西部では第6次調査、第13次調査、第18次調査、第32次調査との関わりが想定されるが、いずれも300m以上の隔りがある。特に竜華東西線2-2Ⅰ区(5区)では、大形を含む7棟の堅穴住居および多量の土器が出土した531井戸等で構成される居住域が検出されており、西部墓域の古墳時代初頭前半(庄内式古相)における墳墓造営を推進した集団であった可能性が高い。東・西部両墓域の形成は、古墳時代前期前半(布留式古相)を境として築造を停止しており、これに符合して周辺の集落数の減少傾向が著しい。これらの現象は中河内地域全般で見られるほか、当該期の政治の中核部であった大和盆地南東部に於ける集落推移の動向と共通していることから、当該期の政治的な衰勢現象と連動した中で推移したことが推定される。このように、久宝寺遺跡および加茂遺跡を含めた一帯は、北面する河内湖および旧大和川水系を媒介とした湾津的機能を持つ遺跡群で、古墳時代初頭前半(庄内式古相)~前期前半(布留式古相)においては、大和盆地南部を頂点とする政治体制の中で、西日本を中心とした人・物の中継地としてのネットワーク基地的な役割を果たしたものと考えられる。

古墳時代中期

当該期の集落は、現久宝寺駅付近を中心として南北方向に流路を持つ自然河川を挟んで東・西に分布している。規模的には東部の集落規模が大きく本調査の24・25調査区の他、第24次調査、第29次調査、第33次調査、第59次調査で集落域を構成した遺構群が検出されており、現時点では自然河川から東約500mが集落域であったと推定される。西部の集落は第24次調査(2・3調査

区)、第59次調査で居住域を中心とする遺構が検出されている。それより西側で行われた第28次調査(4区)、多目的広場では水田が検出されており、これらが西部の集落に関わるものと考えられる。集落域を南北に縦断する自然河川については、これまでの調査で幅60m以上が想定されるもので、付随する施設としては、府文化財調査センター95-8・9トレンチ、96-1トレンチの堰2基(堰1・2)の他、堰の上流部にあたる南部で実施された第39次調査、第43次調査、第57次調査では、河川の護岸保持のために講じられた護岸水制が検出されている。堰1・2については、納穴を有する二俣木を堰部材に使用した合掌型の堰で、堰2については、その全長が40mを超えるものと推定される。河川管理技術の確立が一定水量の確保を可能とし、集落域の拡大を促進した要因であったと考えられる。河川管理を可能とした水制技術については、当該期における須恵器・韓式系土器の出現に表出されるように、朝鮮半島南部を中心とした渡来系集団等との有機的な関係が推定される。その他、第24次調査の6調査区で検出した竪穴住居(SI31001)からは、南九州系の成川式土器に比定される壺・高杯が出土しており、古墳時代中期中葉～後半における「隼人」の足跡を推定するうえで一石を投じる結果となった。

古墳時代後期

調査地西部の1調査区および調査地東部の17調査区～26調査区で居住域に関連した遺構が検出されている。17調査区以東では、自然河川が埋没した古墳時代中期中葉以降は、比較的安定した堆積状況が示されており、このような条件を背景として集落規模の拡大が計られたものと推定される。古墳としては、大阪府文化財調査研究センターの98-1トレンチで、古墳時代後期中葉に比定される七ツ門古墳が検出されている。七ツ門古墳は、扁平な板状の石材によって構築された横穴式石室を主体部に持つ古墳で、平野部における立地と構築石材にみる特異性を特徴としている。平野部に構築された七ツ門古墳の存在は、当該期の墓所が生駒山西麓部に限定されて築造されている趨勢にあって稀有な例であり、その点において生駒山西麓部に築造を許された被葬者氏族層より有力な氏族階層が存在したことを物語っている。調査地一帯は、物部守屋と蘇我馬子の仏教の摂取をめぐる争乱『日本書紀』[用明二年四月(587)]の記述にみる「澁河家」に象徴されるように、当遺跡を含む一帯は物部連氏の本貫地と目されていることから、七ツ門古墳の被葬者としては、当該期の大和朝廷の政治中枢の一翼をになう大連を輩出した物部氏一族の有力者であった蓋然性が高い。

飛鳥・奈良時代

飛鳥時代の遺構・遺物は、調査地東部の20・24調査区を中心に検出されているが溝を中心とした遺構が中心である。また、18調査区では、近世時代の溝(SD111)からではあるが、高句麗様式の単弁8弁蓮華文軒丸瓦の小片が1点(5)出土している。この瓦は、調査地の東方約500mの淡川5丁目に鎮座する天神社付近が寺域と推定されている飛鳥時代前期創建の淡川廃寺の創建瓦と考えられる。遺構以外では、飛鳥時代後半時期の地震痕跡を示す砂脈が17調査区～26調査区で検出されており、『日本書紀』に記された天武十三年(684年)の地震(白鳳の南海地震)に対応する可能性がある。

奈良時代の遺構は、2調査区を除けば調査地東部の17調査区～26調査区の広範囲で検出されている。集落の中核を成す掘立柱建物・井戸を検出した調査区は、23・24調査区であり、集落域の広がり、その地点より更に東部で実施された第29次調査、第33次調査、第52次調査、第63次調査

に及ぶ。第33次調査における墨書土器・三彩陶器壺・円面硯等の遺物の他、第29次調査から出土した木簡の記載内容や、その木簡の出土地点に近接する第63次調査から出土した「郡□」と記された墨書土器の出土は、近接位置に郡衙等の役所が存在したことが想定される。一方、調査区西部の2調査区では、井戸1基(S E 501)を検出しており、水処理施設で検出された集落との関係が推定される。水処理施設の調査では、櫃を井戸枠の転用した井戸の他、出土遺物としては「狛犬」「大」「東」等が記された墨書土器や祭祀に用いられた墨書人面土器、斎串等が出土している。

平安時代

平安時代前期の集落は調査区東部の15～17・25調査区で検出されている。15調査区では、内部に大量の灰・炭を含む土坑内から緑釉陶器椀が出土している。16調査区では、埋置された須恵器大甕が検出されており、内部から多くの完形品を含む土器器皿・椀・鉢、須恵器壺等が出土している。15調査区～17調査区で検出された遺構群の西部および南部への広がり、第24次調査、第28次調査で検出されており、时期的には10世紀前半に集中することから、比較的短期間の集落であったようである。

平安時代後半の遺構は、17調査区・19調査区の他、第24次調査で検出されているが、量的にも僅少で散発的な分布状況が窺える。

室町時代

1調査区～16調査区については、当該期に対応する地層を重機により掘削したため不明である。上層から調査対象とした17調査区～26調査区の調査においても、当該期の遺構・遺物は希薄であった。遺構としては、唯一、23調査区南部から24調査区の北部にかけて室町時代後半に比定される井戸1基(S E 205)が検出されている。上面の形状が円形を呈し、規模が東西幅6.0m、南北幅6.0m、深さ0.75mを測る大型の素掘り井戸であるが、短期間の使用が想定される以外は性格等は明確でない。

近世

近世以降の遺構については、調査深度の関係から面的には調査地東部の調査区を中心として検出されている。生産域に関連した遺構が中心で、24調査区～26調査区で検出された水田面においては、牛馬耕による多条の小溝や一筆耕地を区画する道路状遺構・水路等のほか、17調査区では周辺部分を削平することにより、形成された鳥畑と水田が検出されている。鳥畑に付随して瓦製の井戸側を有する井戸が、調査区全域で検出されている。これらの井戸は、はね釣瓶を持つ農耕用井戸で、大和川の付け替えが行われた江戸時代中期以降に設けられたものである。13・24調査区で検出した井戸には、はね釣瓶の横木を固定する木柱の痕跡が検出されている。

註1 原田昌則他 2001「久宝寺遺跡第24次発掘調査報告書—大阪電華都市拠点地区電華東西線3工区の掘削工事に伴う—」(財)八尾市文化財調査研究会報告69)の刊行後、(財)元興寺文化財研究所の角南聡一郎氏、佐藤亞聖氏、(財)松山市生涯学習振興財団の梅木謙一氏、鹿児島大学助教授の橋本達也氏から第3-1面で検出した5世紀中葉～後半に比定されるS I 31001出土の壺1点(117)、高杯2点(118・119)について、南九州系の「成川式」に共通したものがあるとの指摘を受けた。また118・119の高杯については、橋本達也氏から胎土の共通性があり、模倣品ではなく搬入品である可能性が高いとされた。また近接する地点で、(財)大阪府文化財調査研究センターにより実施された95-8トレンチの第5層(洪水)からも同形態

の高杯1点(99)が出土している。後藤信義・本田奈都子1996「久宝寺遺跡・竜華地区(その1)発掘調査報告書」『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第6集』。なおS131001出土の南九州系土器については、梅木謙一 2003「3近畿の西部瀬戸内系土器-複合口縁壺を中心に-」五、桜井市勝山池(勝山古墳)出土の南九州系土器の再検討」『初期の古墳と人の考古学』学生社で一部触れられている。

<参考文献>

- ・2003『財団法人 大阪府文化財センター年報 平成14年度』(財)大阪府文化財センター
- ・金光正裕他 2005『久宝寺遺跡 発掘調査成果-2001~2004年度のまとめ-』(財)大阪府文化財センター
- ・西村 歩他 2003「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書V-大阪竜華都市拠点上地区面整理事業(都市機能更新事業)に伴う発掘調査-」『(財)大阪府文化財センター調査報告書 第103集』(財)大阪府文化財センター
- ・原田昌則他 2004「久宝寺遺跡(第28次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告77』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・西村 歩 2001「久宝寺1号墳の調査成果」『大阪府埋蔵文化財研究会(第43回)資料』大阪府教育委員会、(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・西村 歩・奥村茂輝他 2004「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書VI-大阪竜華都市拠点地区竜華東西線建設に伴う発掘調査-」『(財)大阪府文化財センター調査報告書 第118集』(財)大阪府文化財センター
- ・田中清美 1986「加美遺跡の検討」『古代を考える43』古代を考える会
- ・後川忠太郎 2003「久宝寺遺跡墓群の調査」『大阪府埋蔵文化財研究会(第46回)資料』大阪府教育委員会、(財)大阪府文化財センター
- ・原田昌則 2001「中河内地域における定型化する古墳以前の墓制について」『実証の地域史-村川行弘先生頌寿記念論集』村川行弘先生頌寿記念会
- ・酒 斎 2001「5. 久宝寺遺跡第34次調査(KH2000-34)」『平成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則 1993「Ⅲ久宝寺遺跡第6次調査(KH90-6)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告37』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助 1992「17. 久宝寺遺跡第13次調査(KH91-13)」『平成3年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・森本めぐみ 2000「15. 久宝寺遺跡第32次調査(KH99-32)」『平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・山田隆一 1994「古墳時代初頭前後の中河内地域-旧大和川流域に立地する遺跡群の枠組みについて-」『弥生文化博物館研究報告 第3集』大阪府立弥生文化博物館
- ・原田昌則他 2003「久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書-大阪竜華都市拠点地区竜華東西線4. T区に伴う-」『(財)八尾市文化財調査研究会報告74』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・成海佳子・樋口 薫・金親満夫 2001「4. 久宝寺遺跡第33次調査(KH2000-33)」『平成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助 2005「13. 久宝寺遺跡第59次調査(KH2004-59)」『平成16年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・後藤信義・本田奈津子 1996「久宝寺遺跡・竜華地区(その1)発掘調査報告書」-JR久宝寺駅舎・自由通路設置に伴う-『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第6集』(財)大阪府文化財調査研究センター

- ・後藤信義他 1998「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅱ—一般府道住吉八尾線付け替え事業に伴う発掘調査—」『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第26集』(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・原田昌則他 2001「久宝寺遺跡第24次発掘調査報告書—大阪竜華都市拠点地区竜華東西線3工区の掘削工事に伴う—」『(財)八尾市文化財調査研究会報告69』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・本田奈津子 1996「古墳時代の合掌型塚—久宝寺遺跡・竜華地区検出例をもとに—」『大阪文化財研究第10号』(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・小山田宏 2001「第二章 古代の土木技術 四、渡来人と治水技術」『開館記念特別展 古代の土木技術』大阪府立狭山池博物館
- ・赤木克祝他 2001「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅲ—一般府道住吉八尾線付け替え事業に伴う発掘調査—」『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第60集』(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・坪田真一・金親満夫 2004「渋川庵寺第2・3次調査」『(財)八尾市文化財調査研究会報告79』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 2004「大阪・久宝寺遺跡」『木簡研究 第26号』木簡学会
- ・樋口 薫 2005「9. 久宝寺遺跡第52次調査 (KH2003-52)」『平成16年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会

図 版



保存処理が完了した404号墳の組合式木棺
(八尾市立埋蔵文化財センター)



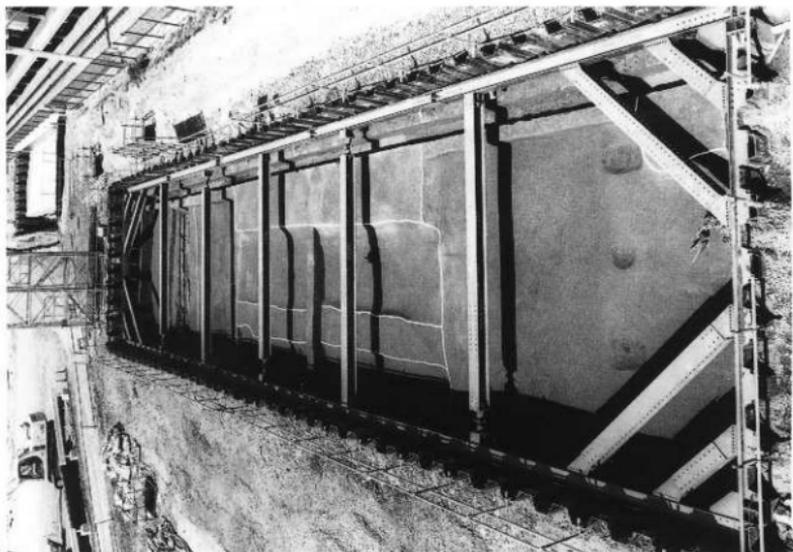
調査地からの遠景 調査地を含む旧国鉄電筆操車場跡地から東方生駒山地を望む(西から)



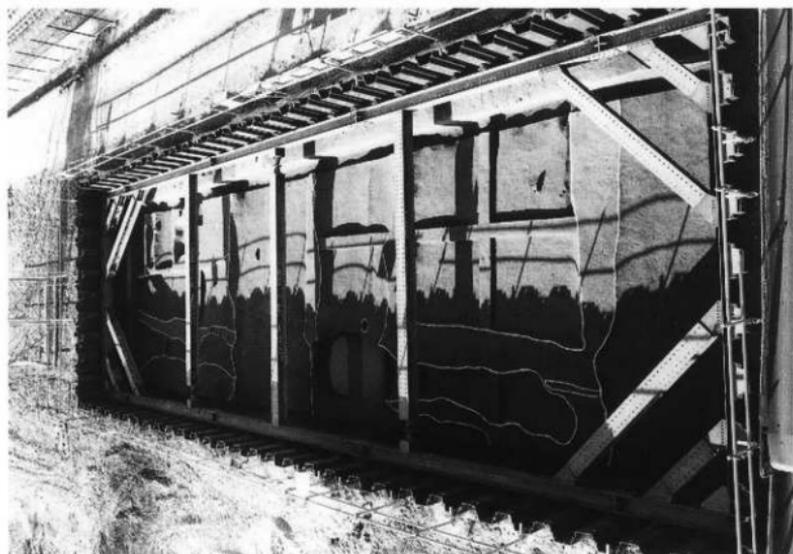
調査地からの遠景 調査地を含む旧国鉄電筆操車場跡地から西方大阪湾明石海峡を望む(東から)



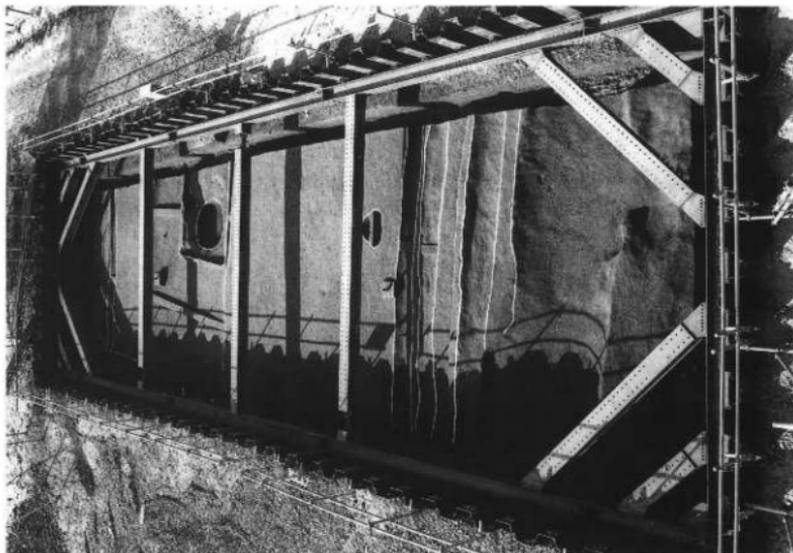
調査地を含む旧国鉄電車操車場跡地全景(上が東)



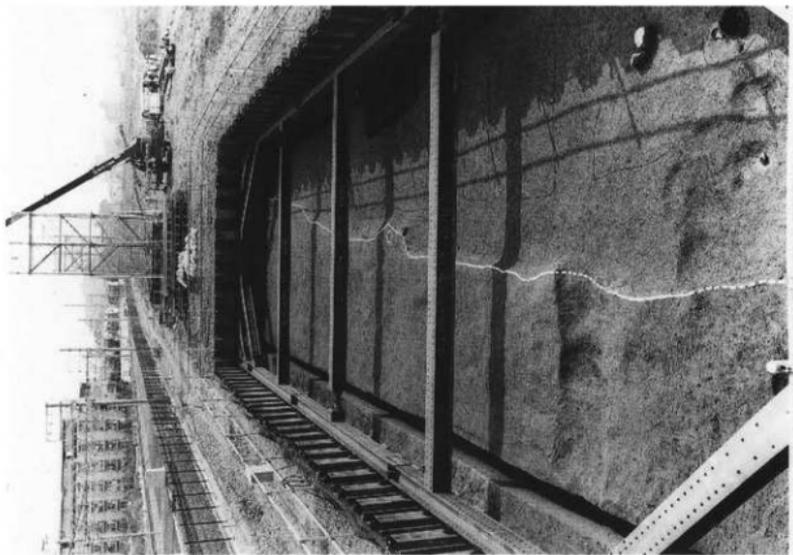
17調査区 全景(東から)



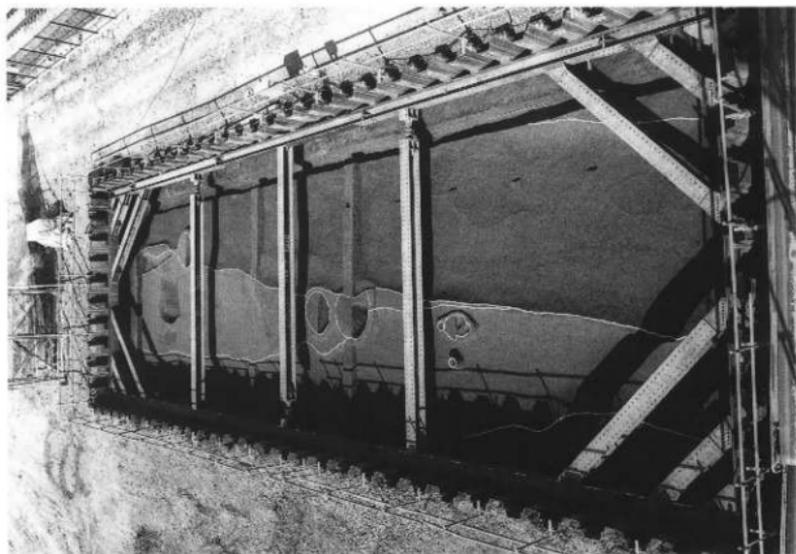
18調査区 全景(東から)



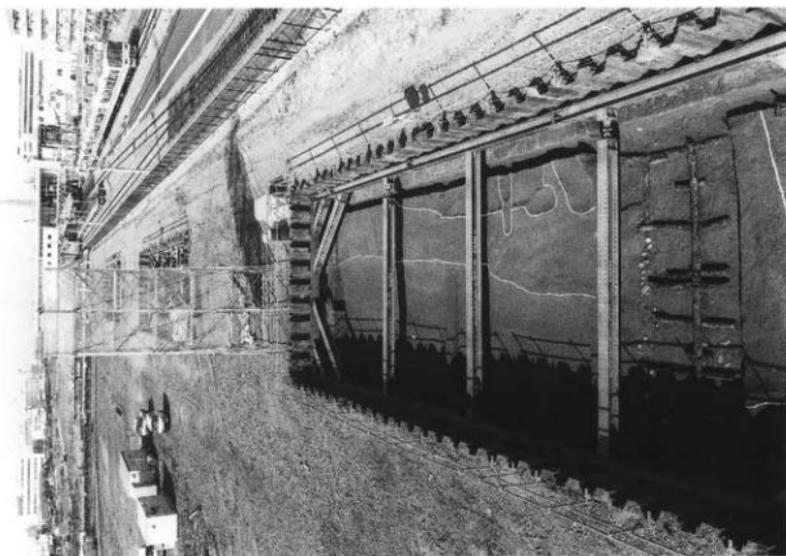
19調査区 全景(東から)



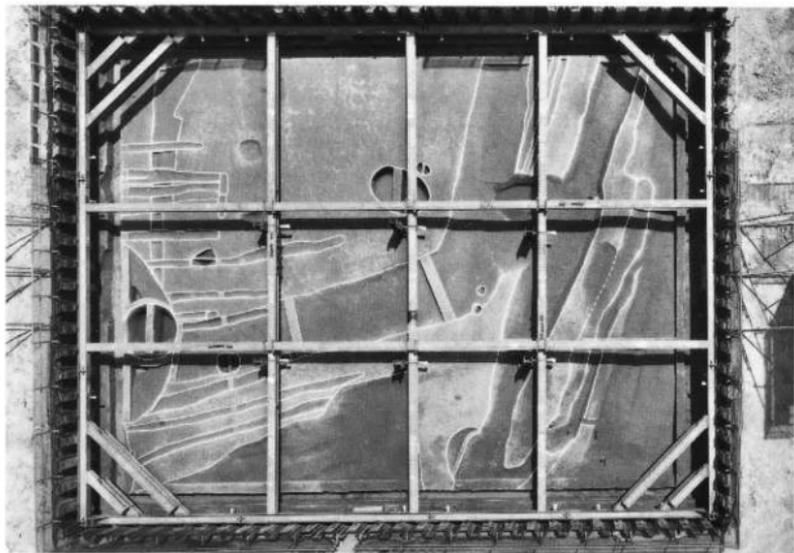
20調査区 全景(西から)



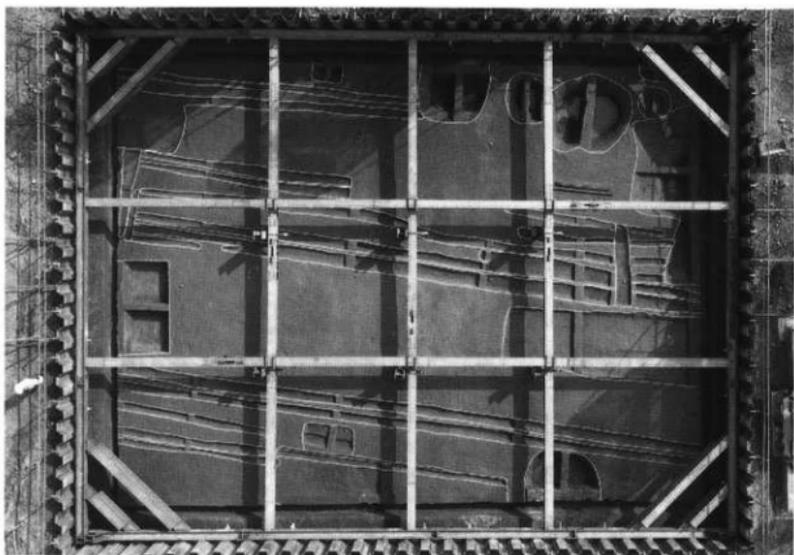
21調査区 全景(東から)



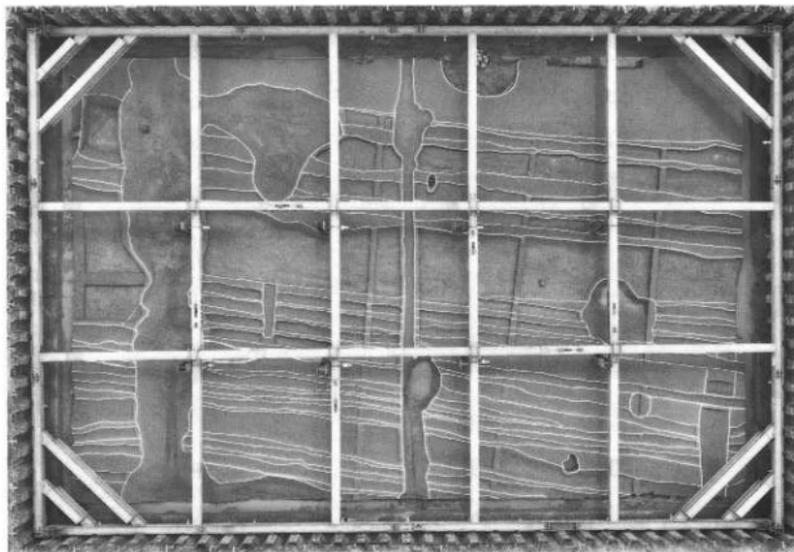
22調査区 全景(東から)



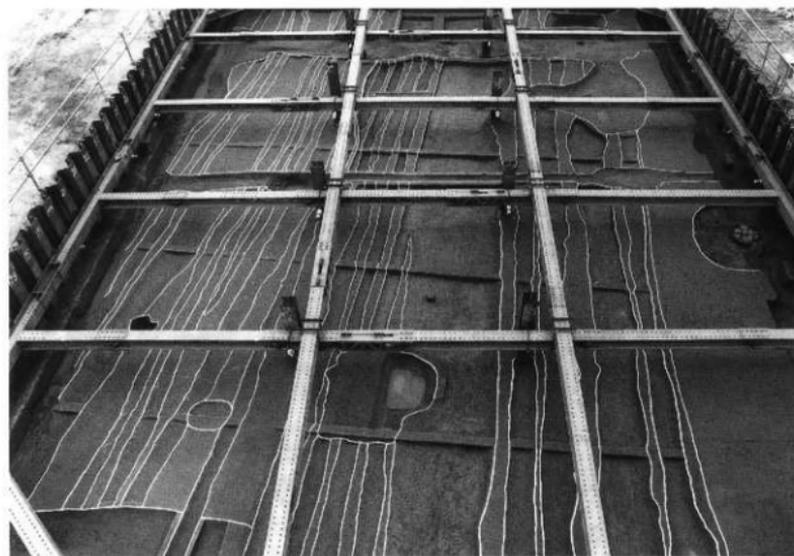
24調査区 全景(上が東)



25調査区 全景(上が東)



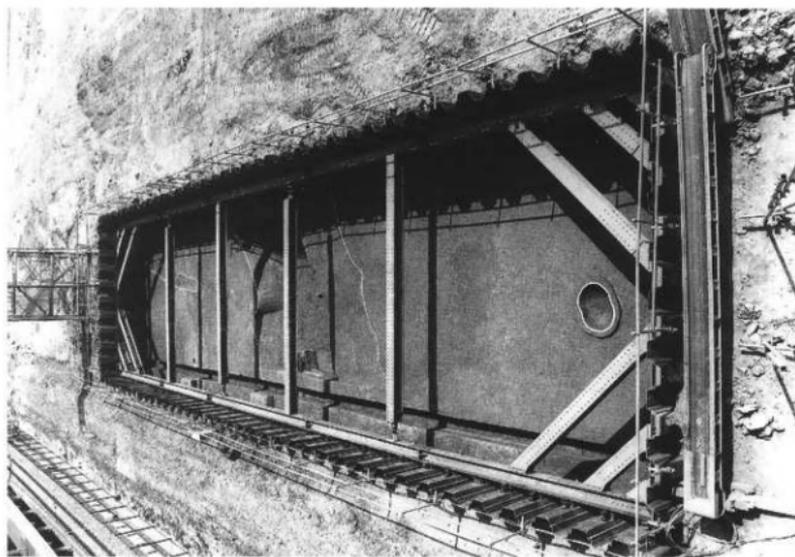
26調査区 全景(上が東)



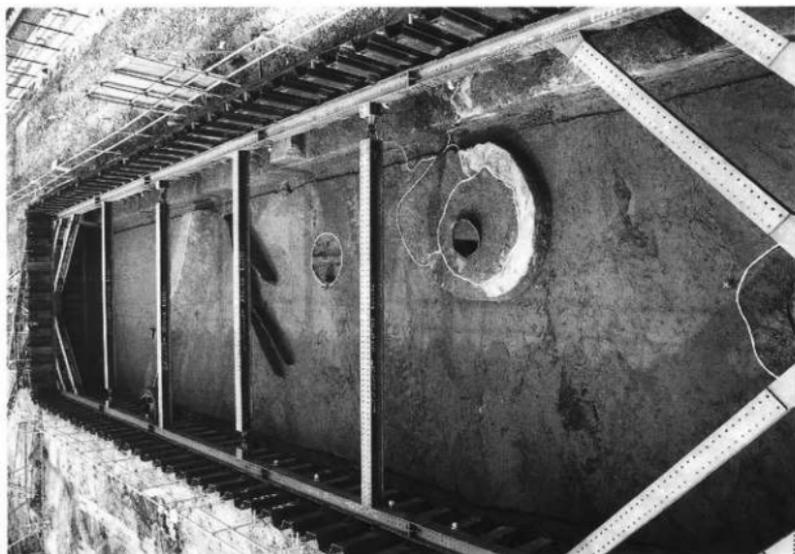
26調査区 全景(南から)



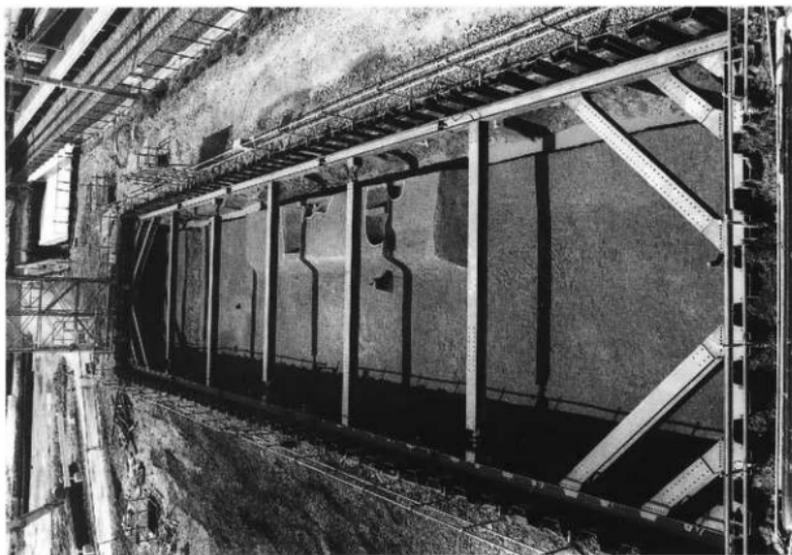
14調査区 全景(西から)



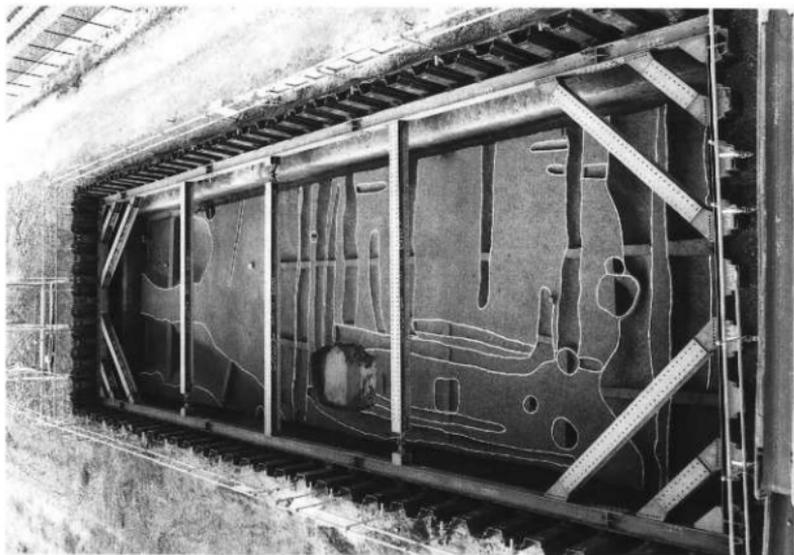
15調査区 全景(西から)



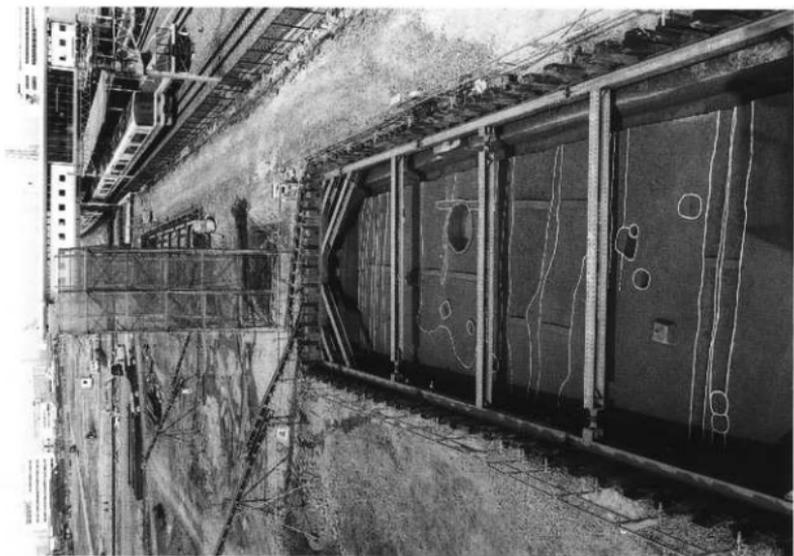
16調査区 全景(東から)



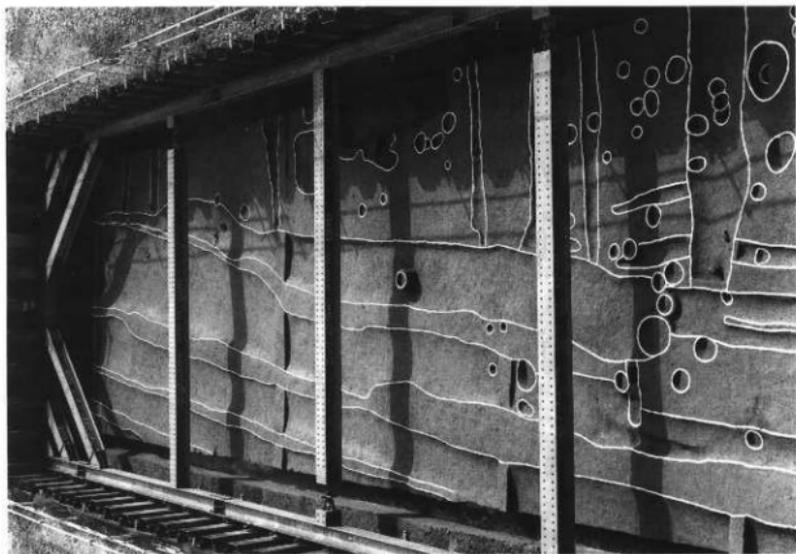
17調査区 全景(東から)



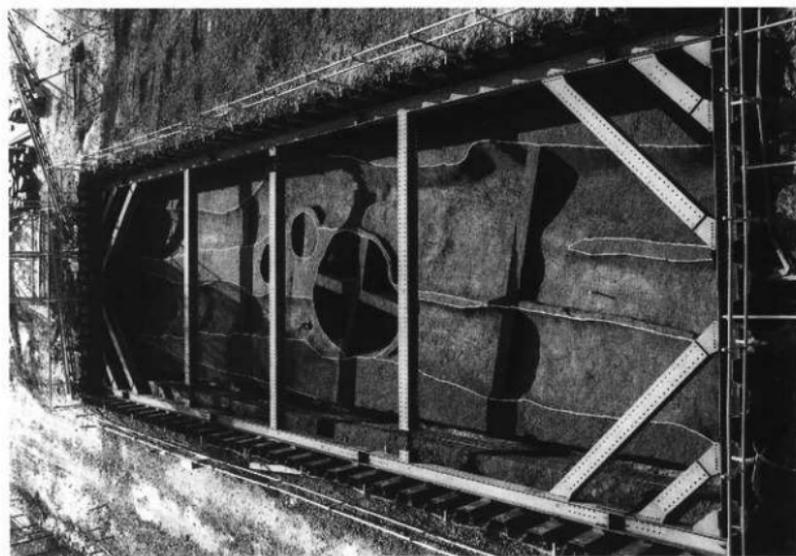
18調査区 全景(東から)



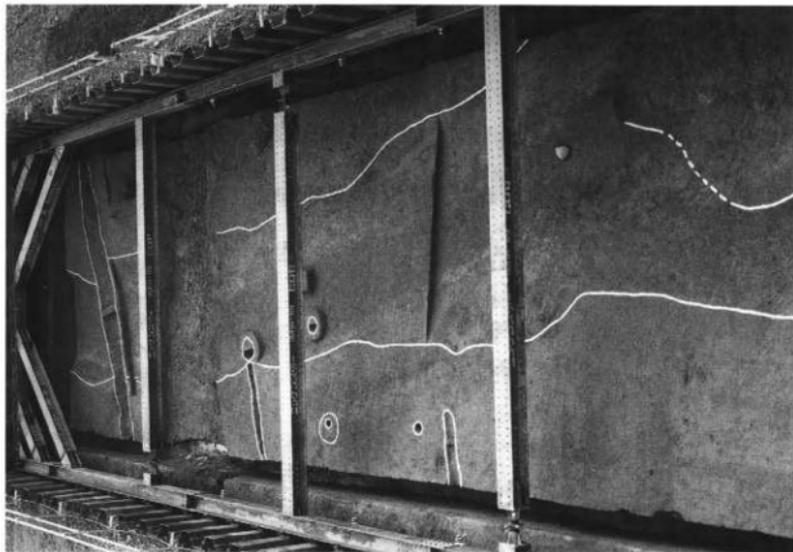
19調査区 全景(東から)



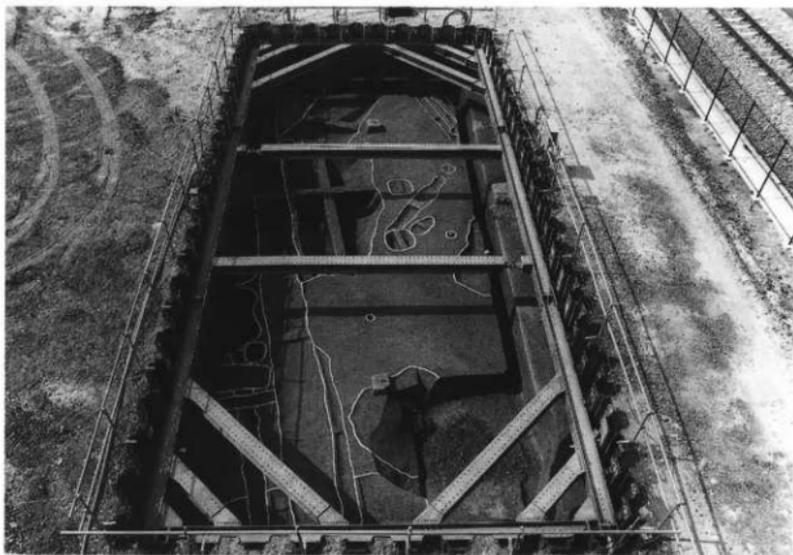
20調査区 全景(西から)



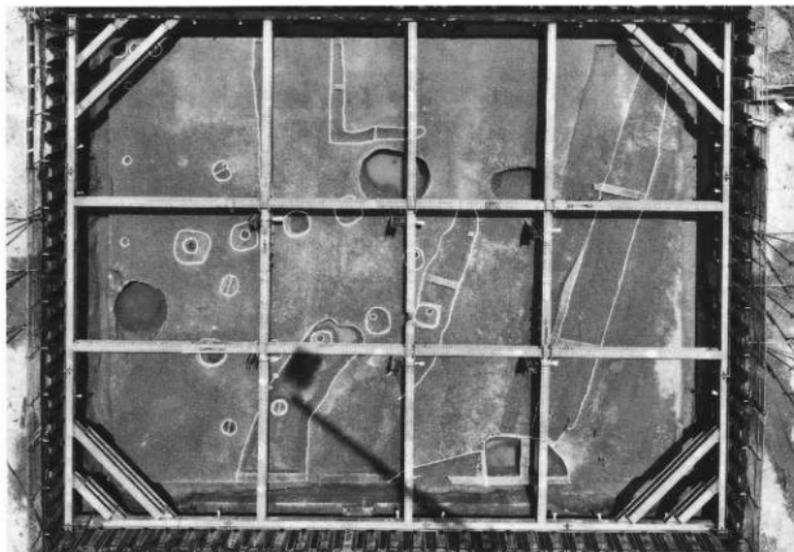
21調査区 全景(西から)



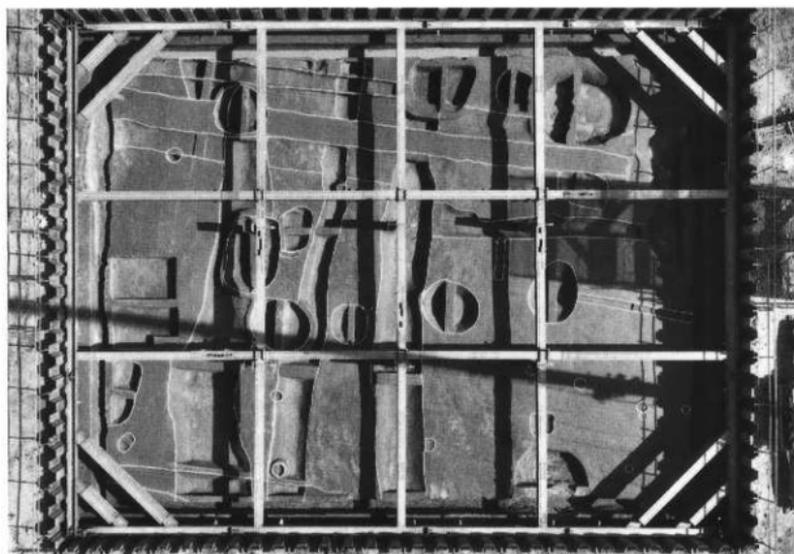
22調査区 全景(西から)



23調査区 全景(東から)



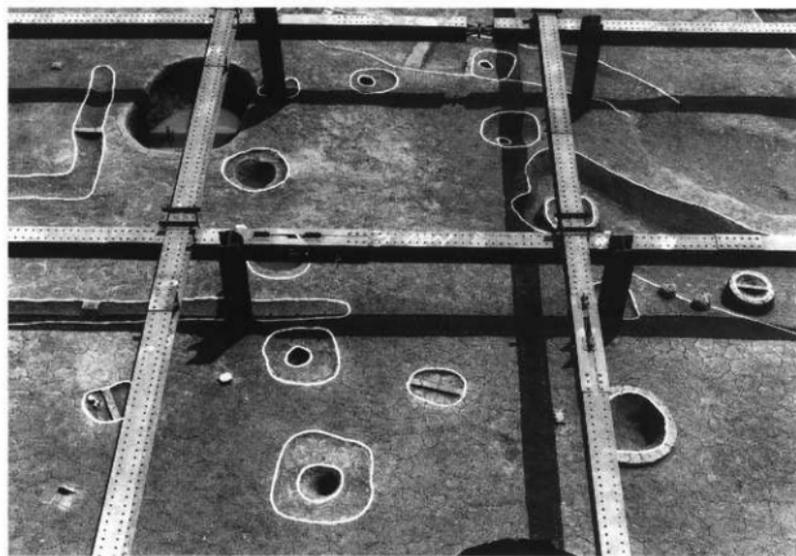
24調査区 全景(上が東)



25調査区 全景(上が東)



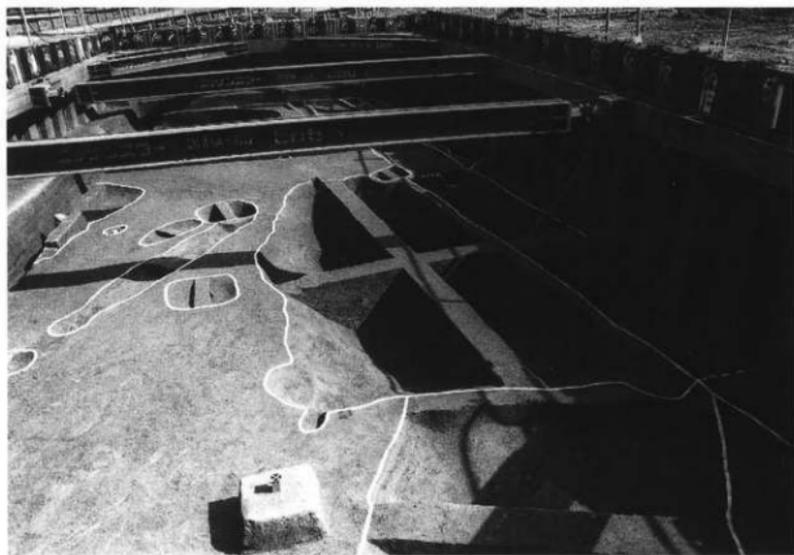
26調査区 全景(上が東)



24調査区 SB203検出状況(北から)



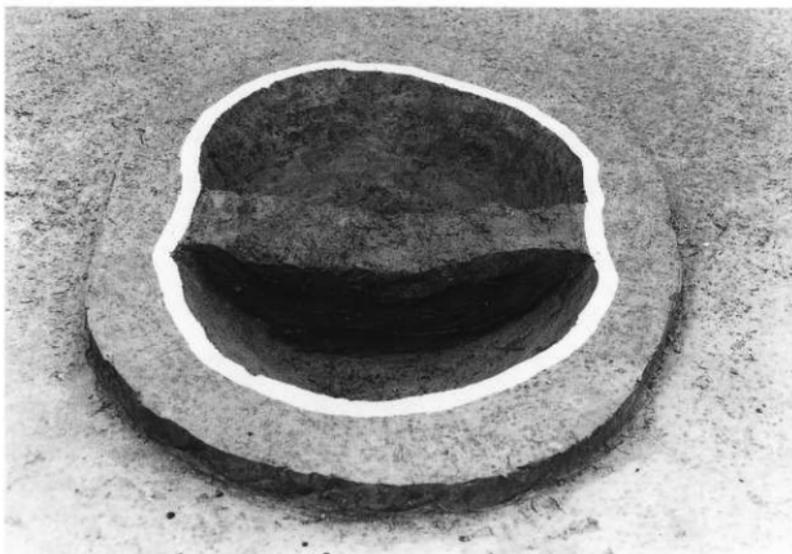
20調査区 S E 203検出状況(南から)



23調査区 S E 205検出状況(西から)



23調査区 S E 206検出状況(北から)

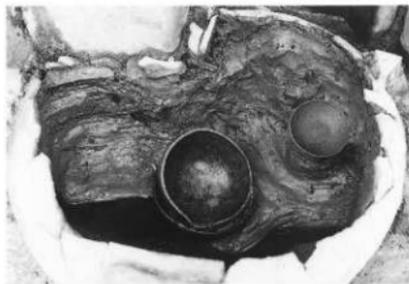


15調査区 S K 201検出状況(南から)

16調査区 SK203検出状況(北から)



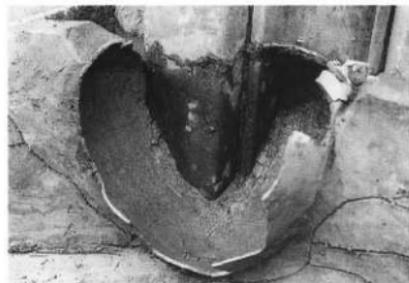
同 上 上部遺物出土状況(北から)

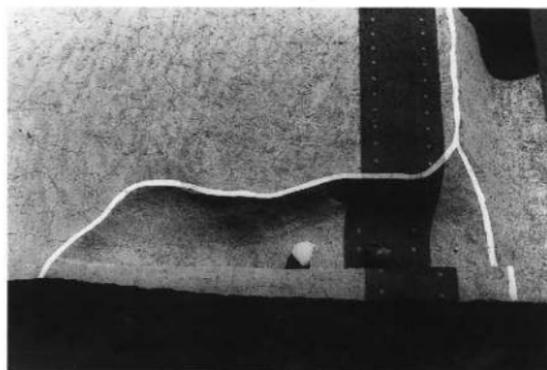


同 上 下部遺物出土状況(北から)

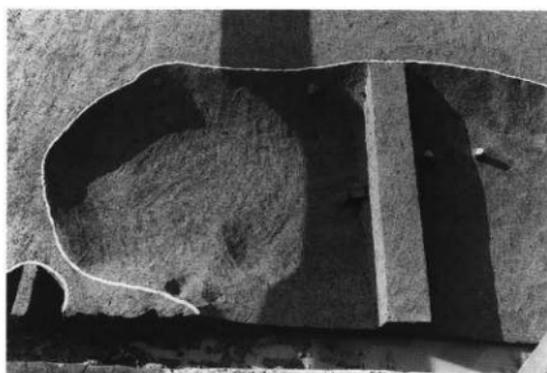


同 上 完掘状況(北から)

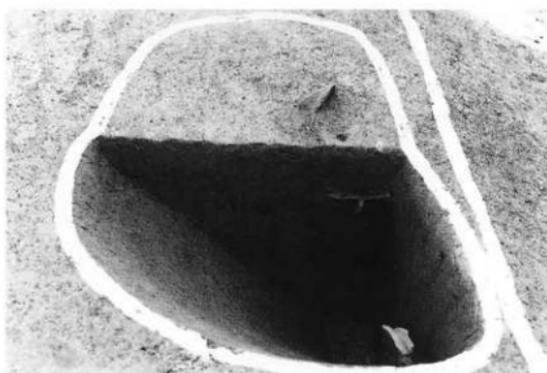




17調査区 S K207検出状況
(北から)



18調査区 S K209検出状況
(北から)



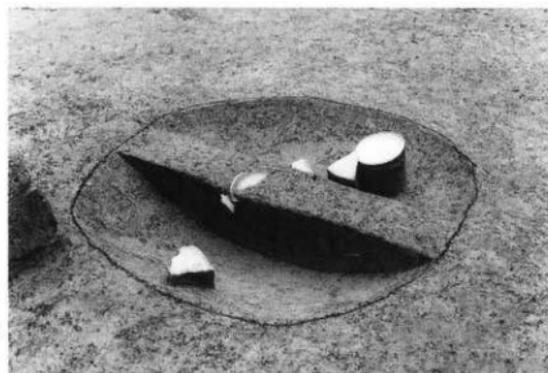
19調査区 S K213検出状況
(北から)



23調査区 SK 222検出状況
(東から)



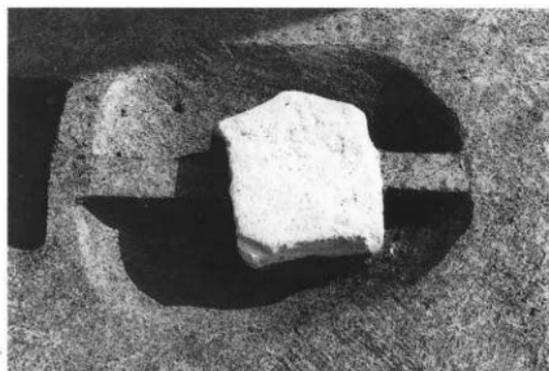
25調査区 SK 231検出状況
(南から)



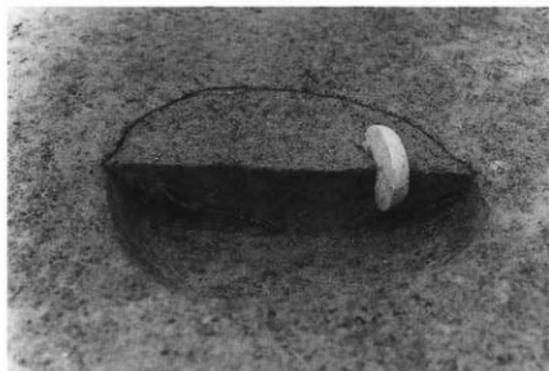
26調査区 SK 236検出状況
(南から)



22調査区 S P 2100検出状況
(南から)



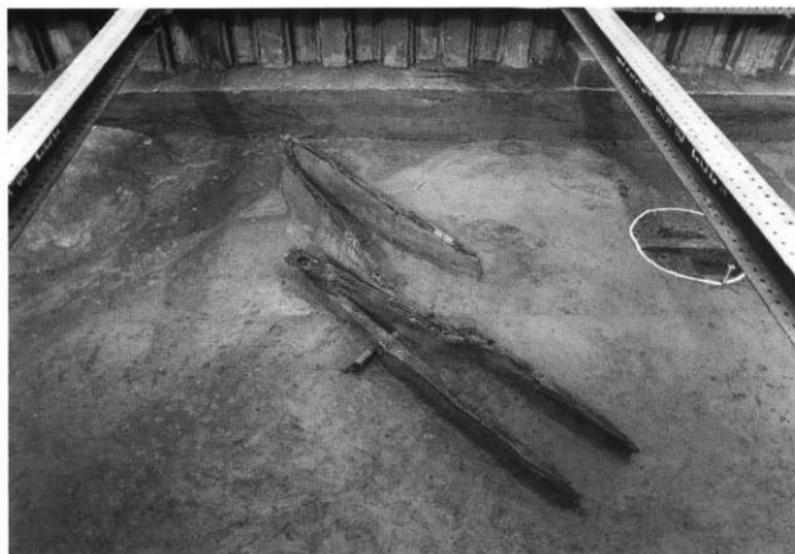
24調査区 S P 2130検出状況
(北から)



26調査区 S P 2145検出状況
(北から)



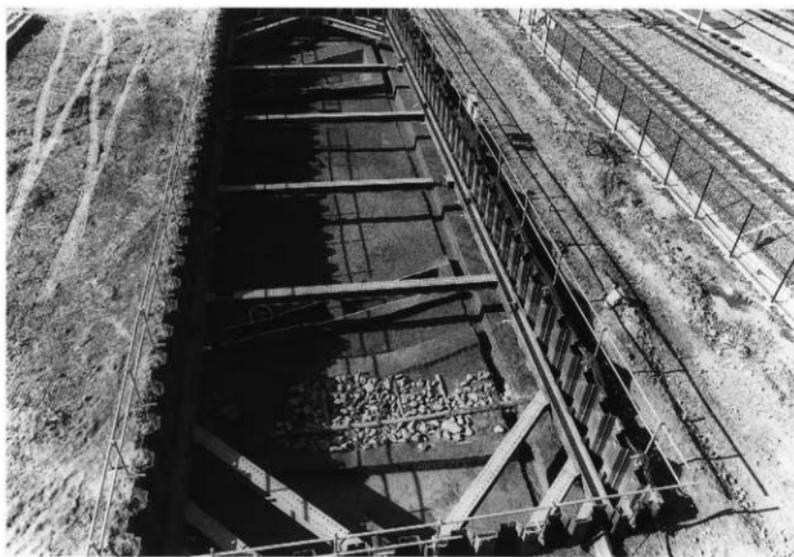
15調査区 N R 201検出状況(南から)



16調査区 N R 202曜部材検出状況(南から)



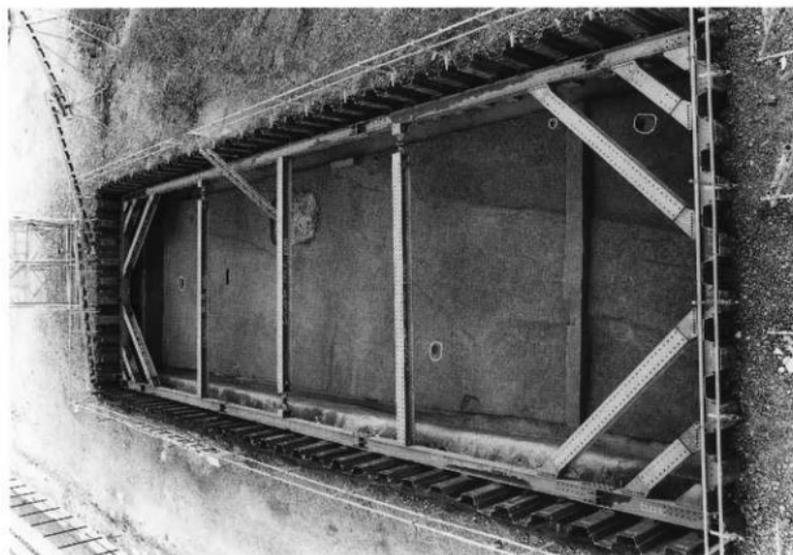
1調査区 全景(上が西)



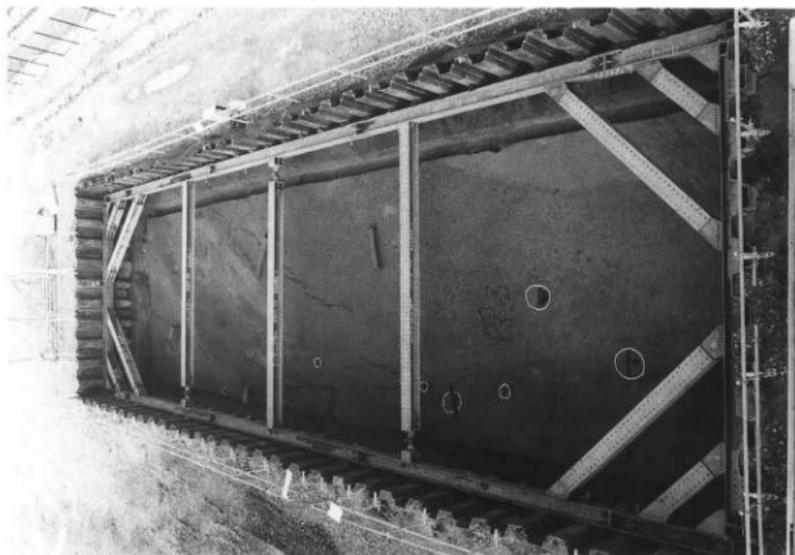
14調査区 全景(東から)



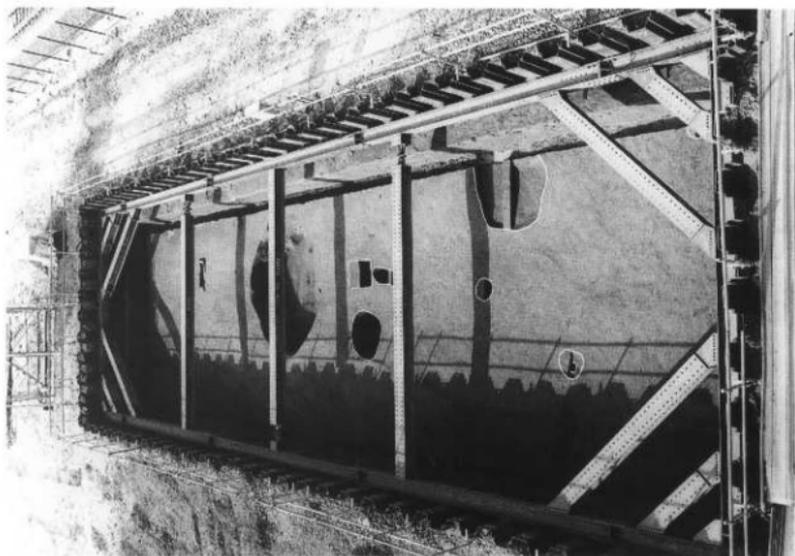
17調査区 全景(西から)



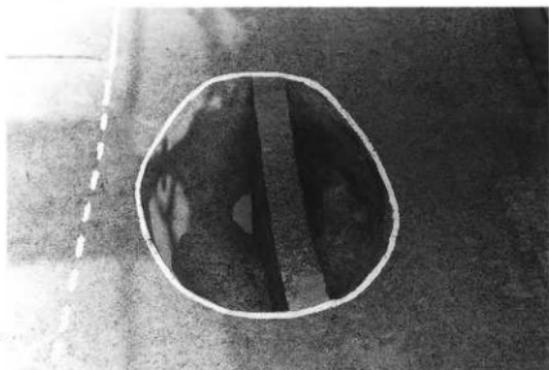
18調査区 全景(西から)



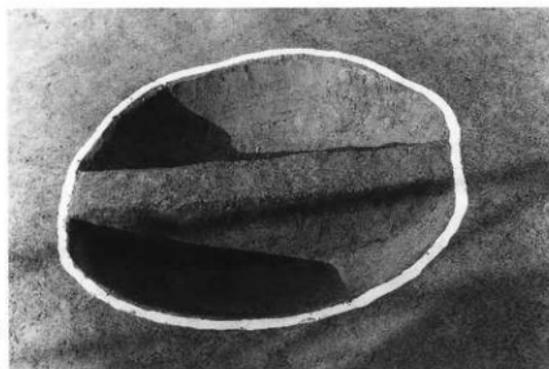
20調査区 全景(東から)



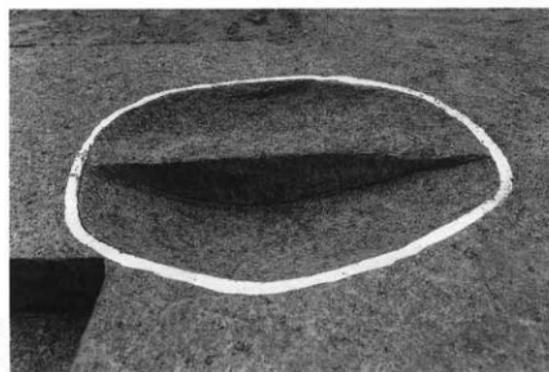
21調査区 全景(東から)



17調査区 S K 301検出状況
(西から)



17調査区 S K 302検出状況
(南から)



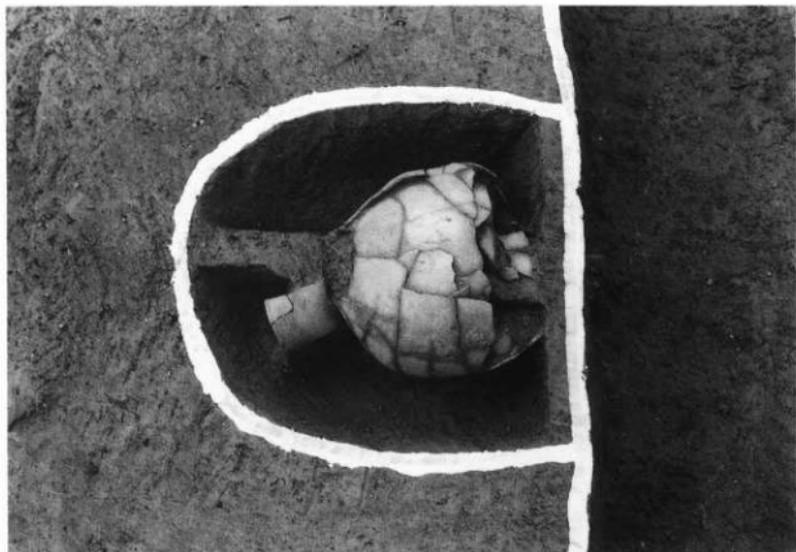
20調査区 S K 305検出状況
(東から)



1調査区 SD301内木製品出土状況(東から)



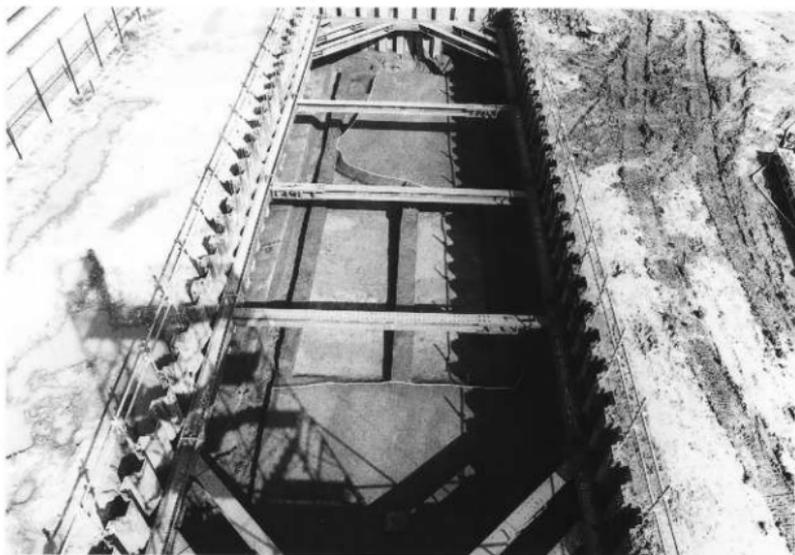
14調査区 土器墓301検出状況(西から)



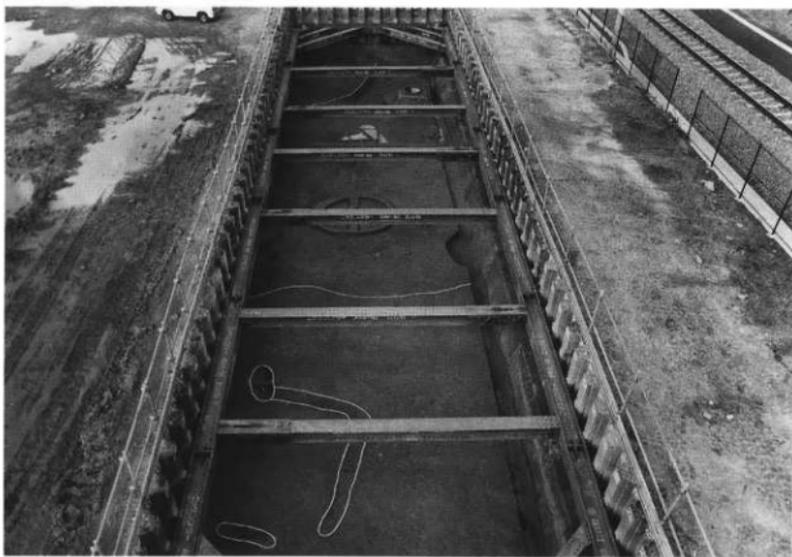
14調査区 土器棺墓302検出状況(南から)



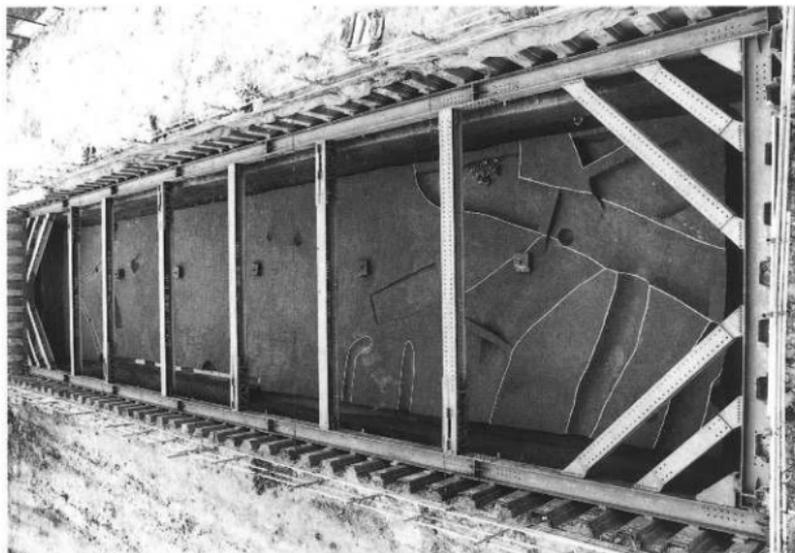
14調査区 土器棺墓302検出状況(東から)



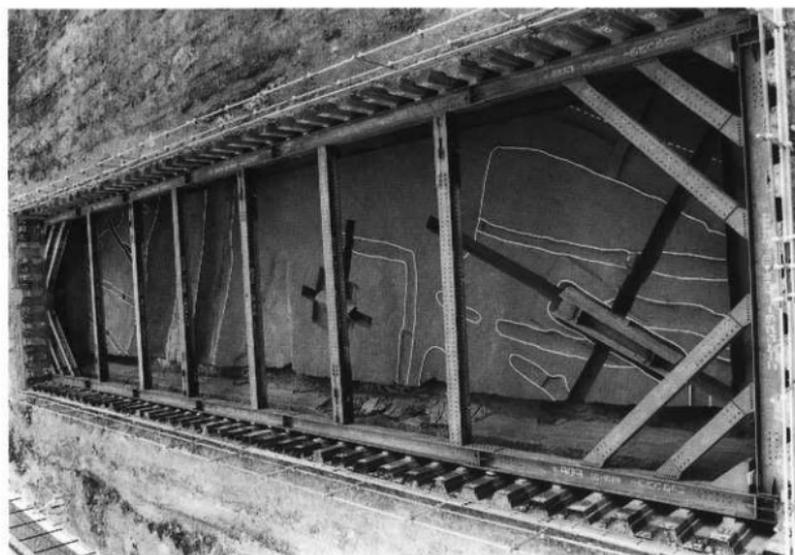
7調査区 全景(西から)



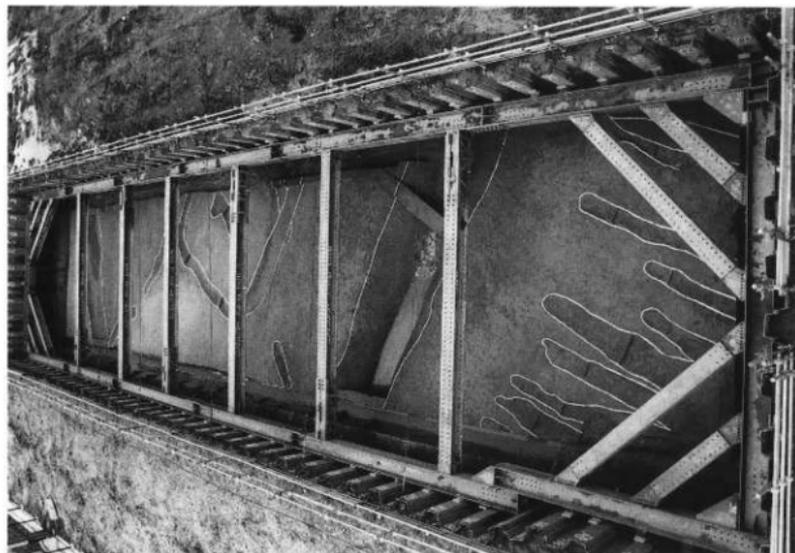
8調査区 全景(東から)



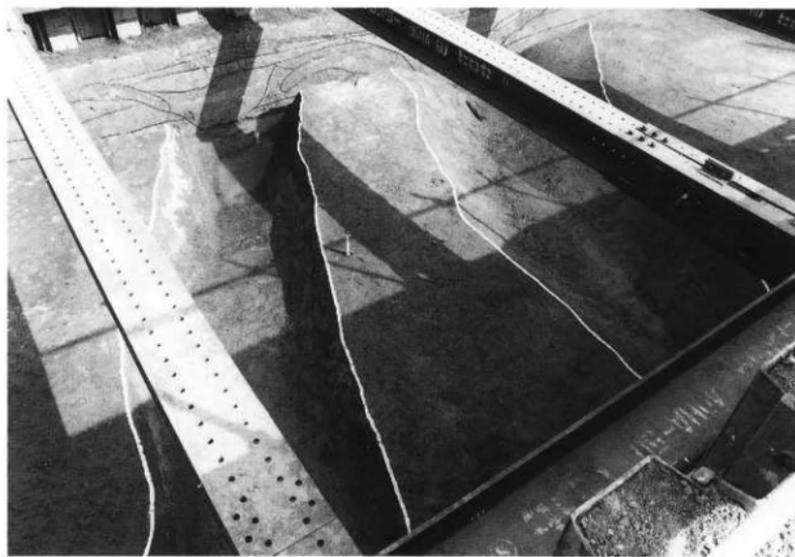
9調査区 全景(東から)



10調査区 全景(西から)



11調査区 全景(西から)



10調査区 S D412、413検出状況(南から)